

宮城野区

1 区の成り立ち

(1) 位置

宮城野区は、市の北東部に位置し、仙台駅東口から仙台塩釜港にかけて広がる区域です。東は太平洋に面し、西は仙台駅東口一帯の市街地が広がり、北は県民の森の一部である丘陵部、南に広がる平野部は若林区と接しています。

JR東北本線、JR仙石線が区内を横断し、国道4号仙台バイパスや国道45号などの主要幹線道路が通っているほか、仙台駅東口には地下鉄東西線の駅を有しています。



| 宮城野区 | |
|------|-------------------|
| 人口 | 196,885人 |
| 世帯数 | 96,023世帯 |
| 面積 | 58km ² |

※2020.10.1現在推計人口

(2) 成り立ち

宮城野区は、現在の宮城野区西部に位置する市制施行時からの旧仙台市域の一部と、昭和に入り編入した原町や岩切村、高砂村を区域としています。

区名の由来は、かつて市街地の東部一帯に広がり、古くから歌枕として全国に知られた「宮城野」にあります。江戸時代までは、萩や鈴虫の名所として広々とした草原が維持され、都市開発等により原風景が失われた現代においてもなお、「宮城野」という町名は残されています。

2 特性と動向

(1) 現状

宮城野区は他区と比べて年少人口と生産年齢人口の割合が高くなっています。人口1,000人当たりの出生数が5区の中で最も高く、出生数が死亡数を上回る自然増によって区内の人口増加が支えられています。仙台駅の東側やJR仙石線沿線では戸建て住宅や集合住宅が建設されており、岩切や田子などの地域では生産年齢人口の増加が見込まれる一方で、それ以外の地域では人口減少・少子高齢化が進行するこ

とが予想されています。

宮城野区は5区の中で単身高齢者割合が最も高く、鶴ヶ谷など高齢化の進行が顕著な地域も存在しています。地域によって人口構成の変化に濃淡があるため、それにより生じる影響を念頭に置いたきめ細かな対応が求められています。

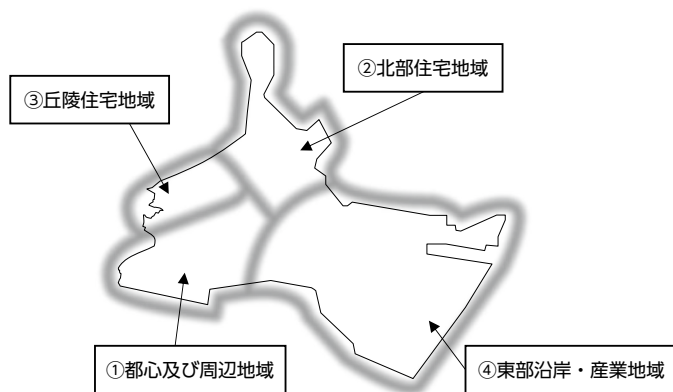
(2) 災害からの復興まちづくり

2011年の東日本大震災では区域の35%が浸水し、中野・蒲生や岡田をはじめとする沿岸地域は甚大な被害を受けました。その後、災害危険区域を設定して内陸への集団移転を行うとともに、防潮堤やかさ上げ道路、海岸防災林などの多重防御、避難のための施設整備などによる総合的な津波対策を実施し、復興への歩みを着実に進めています。

これまで、数多の災害を住民の創意工夫や協働によって乗り越えてきましたが、今後は、東日本大震災の経験と教訓の継承とともに、沿岸部の新たなまちづくりに取り組んでいくことが求められています。

また、七北田川や梅田川の流域においては、大雨や長雨による洪水、台風などにより度々大きな被害を受け、堤防の建設や河川の改修などの対策を進めてきました。近年の豪雨被害も踏まえ、洪水浸水対策に継続して取り組んでいく必要があります。

(3) 地域の特性



① 都心及び周辺地域

仙台駅の東側は、江戸時代には武家屋敷街から農地、その後は果樹園、製糸工場へと姿を変えていきました。北側の二十人町と鉄砲町は、足軽が住む町でしたが、明治時代になると塩釜へ向かう街道

に面し、商店街へと変貌していきます。その後、大規模な土地区画整理事業が進み、宮城野通を基軸とした新しい街並みが形成されるとともに、その周辺地域においても、住宅地が広がっていきました。近年は、東北楽天ゴールデンイーグルスが本拠地を構えるとともに、地下鉄東西線の開業や仙台駅東西自由通路の拡幅に併せて商業施設の開発が進んだほか、宮城県による県民会館など県有施設の集約・移転の検討が進むなど、当該エリア一帯に新たな賑わいづくりの機運が高まっています。

② 北部住宅地域

七北田川沿いに位置する岩切は、多賀城や塩竈、利府へ通じる道と東西に延びる道が交差する交通の要衝です。古墳時代の鴻ノ巣遺跡など多くの集落ができ、中世においても「府中」と呼ばれる行政の中心地域でした。岩切城跡をはじめ、市内最大の板碑の密集地である東光寺を有するなど歴史の息吹が感じられる場所が随所にあります。当該地域を統括していた留守氏が岩手県に移った後は、農村が広がり、稲作は有数の生産力を誇るほどになりました。明治時代に鉄道が通ると、交通上の重要性は一層高まり、作物の出荷も進みますが、農業の兼業化とともに、水田や畑地は住宅や店舗などに姿を変え、近年は若い世代が多く集まる地域になっています。

③ 丘陵住宅地域

国道45号以北の丘陵部は、江戸時代には山林が広がり、藩主の狩猟の場ともなっていました。しかし、戦後に人口が急増し、周辺の丘陵を造成して住宅団地が作られるようになり、都市域が拡大していきました。現在は鶴ヶ谷をはじめ、開発時期の早い団地が成熟期を迎えており、市の中でも高齢者の割合が高い地域です。市営住宅の建て替えに伴うコミュニティづくりや、地域固有の課題解決に向けた住民主体の取り組みが進むなど、住民が安心して暮らせる環境づくりが進められています。

④ 東部沿岸・産業地域

七北田川下流域の平野部は、田畑が広がる農業地帯で、居久根と呼ばれる屋敷林に囲まれた農家が点在していました。明治時代を迎えても多くの住民が農業に従事し、戦後も米作中心の農業地帯である状況が続きますが、仙台塩釜港の建設を契機に、工場や倉庫が建ち並ぶようになり、幹線道路が整備されると、大型店や事業所、住

宅が増えてきました。岡田地区南蒲生・新浜などの沿岸部は、東日本大震災の津波により、大きな被害を受けましたが、コミュニティの再生に向けた新たなまちづくりが進められています。また、中野・蒲生地区を中心に産業集積が進んでいるほか、仙台港背後地には、仙台うみの杜水族館や大型商業施設などが立地し、活気をもたらしています。

3 地域づくりの方向性

(1) 海辺のふるさとをつくる

～集い、想いをつなぐまち～

東日本大震災の経験を踏まえ、多重防御の構築に向けたハード面の整備が進み、住民の防災意識や町内会を中心とした災害対応力が向上するとともに、津波で被災した沿岸部においても新たなまちづくりの萌芽が生まれてきています。今後は、震災の教訓を伝える取り組みはもとより、沿岸部に再び人々が集い、笑顔が行き交うまちになるよう、新たな海辺のふるさとをつくります。

東日本大震災の経験と教訓を継承する取り組みを通じて、一人ひとりのあらゆる災害への危機管理意識をより一層高めることで、災害時に誰もが冷静に行動できる安全に暮らせる地域づくりを進めます。

津波被災地域のコミュニティの再生と活性化に向けては、被災された方々が気軽に集い、つながりを深める場づくりに取り組むとともに、地域で暮らす方々の企画立案による域内外の交流創出に向けた取り組みを促進します。

また、海岸公園をはじめ、日和山や蒲生干潟、貞山堀など震災を乗り越えてきた資源の活用を進めるとともに、地元住民の方々などの意見も踏まえて、震災の記憶や地域の文化を伝えるコンテンツの充実・発信に取り組み、東部沿岸地域一帯の回遊性を向上させ、海辺の賑わいづくりを推進します。

(2) 都心のシンボルエリアをつくる

～賑わいをつくり、可能性を活かせるまち～

仙台駅の東側は、地下鉄東西線の開業及び仙台駅東西自由通路の拡幅などを契機として、民間開発や集客促進に向けた機運が高まっています。今後は、「働く」「住む」「学ぶ」「楽しむ」といった豊かなライフスタイルの一部として、より魅力あふれる都市空間とするため、住民や民間企業とともに知恵を出しあい、多くの人々が気軽に集い、訪れ

るとわくわくするような新たな都心のシンボルエリアをつくります。

仙台駅東エリアの賑わい創出に向けては、地域のまちづくりを担う団体などとの連携を図りながら、イベント開催などの都市空間の有効活用や情報発信を通じて、宮城野通を基軸としたエリア特性を高める取り組みを推進します。

公共空間の利活用については、住民参加型で検討を進めてきた駅東1号、2号公園のほか、榴岡公園や藤村広場など個性豊かな都市空間を活かして、新たな交流や回遊を生み出し、近隣住民やこのエリアで働く方々をはじめ、多くの人々が憩い、賑わう環境づくりに取り組みます。



(3) 心地よいコミュニティをつくる

～支えあい、安心して暮らし続けられるまち～

宮城野区は、5区の中で最も出生率が高く、子育て世代が増加している地域がある一方、開発時期の早かった住宅地を中心に高齢化の進行が顕著な地域もあり、人口構成や課題は地域によって様々です。また、大規模な市営住宅の建て替えが進む地域もあります。今後は、関係支援機関との連携を促進することはもとより、住民同士が世代を超えてつながり、多様性を尊重しあいながら、お互いの顔が見える心地よいコミュニティをつくります。

地域の担い手の育成や交流のための事業を展開するとともに、社会的孤立や地域交通など地域が抱える課題への解決に向け、住民が主体となった関係機関や専門家等との協働の取り組みを促進し、人とのつながりや自分の役割を実感しながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めます。

子育て世代の育児不安や育児孤立の解消に向けては、保育所や児童館など地域の児童福祉施設の運営団体や子育て支援に取り組むNPO等との協働により、子育ての楽しさを実感できるような場づくりや子育て世代のネットワークの形成など、地域のつながりを深める取り組みを進めます。



(4) 新たな魅力に出会える場をつくる

～ふるさとを知り、元気を体感できるまち～

宮城野区には、歴史・自然資源、水族館やプロ野球チームの本拠地、スポーツ施設など仙台市を代表する多くの観光・交流スポットがあります。今後は、多彩な資源を多くの方々がより一層快適に楽しめる環

境をつくるため、民間企業等との連携を進めるとともに、未来の地域づくりの担い手である子どもたちや若者の地元への関心や想いを深めることができるよう、新たな魅力に出会える場をつくります。

区内外の方が訪れる仙台塩釜港周辺地区については、集客力の高い民間施設との連携により、回遊性を高め、エリア一体となった魅力の向上に取り組み、仙台を代表する交流と賑わいの拠点づくりを進めます。

また、市民センターや住民発案の企画を通して、地域の歴史や文化を未来に継承する取り組みを進め、子どもから大人まで、あらゆる立場の方々のふるさとへの意識を育む機会を創出します。そして、こうした学びの場や体を動かす機会、世代を超えた交流の機会をつくることで、地域の魅力を実感し、地域づくりへの参画意識を高める好循環を生み出します。